

環境対策ドイツと日本

大前 繁雄

昨年五月、環境施設視察のためドイツへ行って参りました。ドイツは福祉とともに、環境問題の最先進国といわれていますが、実際訪ねてみて、官民あげでの徹底した取り組みに圧倒されました。

以下、気づいた点について簡単に報告させていただきます。

私たちが訪れたのは、フランクフルト市にあるノルドヴェストシュタット廃棄物処理（以下略してFESといいます）です。

このFESは日本の各地にあるゴミ焼却場と同じような施設ですが、日本と異なる点は経営がFES有限会社という、半官半民の会社（フランクフルト市が51%、民間のレトマン社が49%出資）だという点です。日本も近年、ゴミ処理の民間委託が進んでいますが、焼却施設そのものが民営というのは珍しく、コスト意識、サービス意識の向上という意味で参考にすべきと思いました。この施設で場内見学させて頂いた後、ドイツのゴミ・廃棄物リサイクルシステムについて全般的なレクチャー（説明）を受けました。

1、徹底した分別収集システム

ドイツの分別収集システムは4コンテナシステムと呼ばれています。これは、黄、青、茶、グレーの4色コンテナでリサイクルを行うシステムで、ドイツではどの家庭にも4つのコンテナが並んでいます。黄色い資源材コンテナは再利用対策用の（グリーンポイントが付いている）軽包装材料用。青い資源材コンテナは、紙類とボール紙用。茶色い資源材コンテナは生ゴミ用。そしてグレーのコンテナはその他のゴミ、つまり再利用、再活用の見込みのない最終廃棄物用です。

又、ガラスについては白色、緑色、茶色各系統のガラスを入れるように、3種類のガラス専用コンテナが用意されています。

さらに古着とか、靴寄付用コンテナもあり、どんなものでもリサイクルのレールに乗せようという意気込みが感じられます。

各州の独自性が強いといわれるドイツですが、この分別収集システムはどこに行っても共通しており、私たちの旅路—フランクフルトからロマンチック街道を経てミュンヘンに至るまで—のいたる所でカラフルな美しい形の分別コンテナが見られました。

2、ハード面ではそれほど遅れていない日本

ドイツの系統立ったリサイクルシステムはさすがでしたが、日本もこういった施設や制度といったハード面では、近年急速に進歩しつつありますので、必ずしも一方的にひけを取っているとはいえません。一部にはドイツより進んだ施設も、最近誕生しつつあります。

例えば私がドイツから帰国してすぐ訪問見学した、兵庫県の加東郡にある家電リサイクル工場など、世界のどこに出しても見劣りしないもののように思えました。そこではエアコン、テレビ、冷蔵庫といった家電製品を回収し、分解してリサイクルできるものは、とことん再利用に回そうというのですが、工場の担当者の話しでは再利用率 60%近いという、驚異的な成果を上げているとのことでした。

又、私たちの見学した FES の焼却場なども、操業開始が一九六五年と古かったせいか、最近つぎつぎに建設されつつある日本の新鋭施設などに比べると、劣っている気もしました。

3、問題は意識面でのちがひ

それではドイツと日本の環境対策のちがひはどこにあるのでしょうか。それはひとことで言って市民の「意識」の違いです。

例えば、先の分別収集についても、日本の場合は行政がいうからやる、やらされているという面が多分に見受けられ、ドイツでは市民すべてが進んでやる、地球環境は自分達が守るのだ、という意気込みが充満しているのです。たとえば、日本では若い人の住むワンルームマンションなどで、ゴミの出し方が目茶苦茶で困るという不平がよく聞かれますが、ドイツでは学校での環境教育が徹底しているせいか、そんなことは全く考えられないとのことでした。

又、アイドリングストップについて、日本でも提唱されつつありますが、なかなか浸透していません。ところが、ドイツでの徹底ぶりは凄いもので、どの車も“サイドブレーキを引くよりも先にエンジンを切る”という表現がぴったり当てはまる程でした。

それ以外にも過剰包装の追放、買い物袋の持参、ノーネクタイ、自動車の小型化、市電の普及など、まさに環境先進国にふさわしいハード・ソフト両面での改革が進行しているのには、感心させられました。